

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	二つのンデベレ語
Author(s)	湯川, 恭敏
Citation	熊本大学社会文化研究, 2: 37-51
Issue date	2004-02-29
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/2472
Right	

二つのンデベレ語

湯川 恭 敏

はじめに

アフリカ南部には、同じくンデベレ語 (isindebele) と呼ばれるバントゥ系の言語が、ジンバブエと南アフリカの、互いにかなり離れた地域に話されている。

19世紀のはじめ、南アフリカの印度洋沿岸に近い南緯28度線あたり (今の Vryheid の近く) に住んでいた現在のンデベレ族の中核をなすクマロ (Khumalo) 族は、もとは Ndwandwe 王国に属していた。

Ndwandwe 王国の王 Zwide は南側の Mthethwa 王国を攻めほろぼした。その後、その地に若き王 シャカ (Shaka) の率いるズルー族が混乱に乗じて勢力を伸ばしてきたのでこれを攻めたが、シャカの巧妙な戦術のために大敗し、逆に Ndwandwe 王国は滅亡した。その戦いの際、クマロ族の王ムズィリカズィ (Mzilikazi) は、Zwide の娘の子であったが、祖父に背きシャカの側に与した。

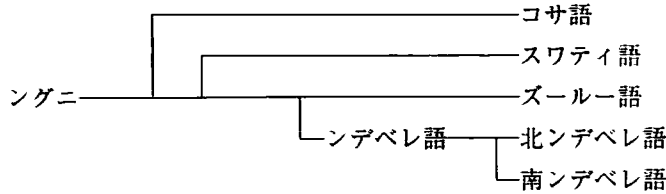
シャカは、ムズィリカズィを破格的に厚遇したが、自らの王国建設を夢見たムズィリカズィは、1822年、シャカの命に服さず、その結果、圧倒的兵力による攻撃を受け、わずか二・三百の兵士を率い南アフリカ高原地帯に逃れた。野武士の集団のような彼らであったが、その後、シャカに追われた人々を含む多くの人々を吸収し、高原地帯に3度定住を試みるが、他部族との抗争に疲れ、1938年さらに北方に逃れ、紆余曲折の末、現在のジンバブエ (当時のローデシア) のブラワヨに都をおいて、強大なンデベレ王国を打ち立てた。もともとその近辺にいたショナ族は、ンデベレ王国に貢ぎ物を贈るなどしてこれに従属した。ンデベレ王国は、ムズィリカズィの次の代に滅亡するが、ンデベレ族自体は、ブラワヨを中心とするジンバブエ西南部に今も居住している。彼らの話す言語がンデベレ語 (北ンデベレ語と呼ぶことにする) であり、ショナ語と並んで、ジンバブエの国語となっている。話し手人口は200万人以上であろう。

一方、南アフリカの現プレトリアの北東にも彼らの一部が残り、現在、独自の文化を持った、やはりンデベレ族と呼ばれる人々が居住する。この地域には、南アフリカのアパルトヘイト時代に Kwandebele という homeland がつくられ、今でもその名前が残っている。ここでもンデベレ語と呼ばれる言語 (南ンデベレ語と呼ぶことにする) が話されている。話し手人口は、60万人を越すと思われる。二つのンデベレ族の居住地は、他の部族によって隔てられている。

上述の如く、この二つのンデベレ語が別れた時期がはっきり分かっている (1938年) ため、今の両者を調べれば、別れて約1世紀半でどのような差異が生じるものであるかの絶好の研究対象になる。本論文では、主として語彙の面でどの程度の差異が生じているかを見るが、文法等の面についても触れる。¹⁾

なお、アクセントについては記述を省略するが、両言語の動詞アクセントについては、湯川 (1997) および湯川 (1998) の記述を比較されたい。本論文では、アクセント表記も省略する。

なお、ンデベレ語を含む「ングニ諸語」の分岐の歴史は次のように推定される。



1. 北ンデベレ語の概略

最初に、以下の記述に必要な範囲内で、北ンデベレ語がどのような言語であるかの概略を述べる。

1-1. 音韻

音韻的には、音節が専ら開音節であること、子音前鼻音（日本語の「ン」のような音）が存在すること、高低アクセントを有することなど、他の多くのバントゥ語と共通の特徴を示し、母音の数は5つ (i, e, a, o, u) である。母音に長短の区別はないが、次末音節の母音は他の母音に比してやや長く発音される。子音は、次の如くである。

b ([b]), bh (放出音²⁾のp), c (歯吸着音³⁾), ch (有気歯吸着音), d (放出音のt), dl (有気側面摩擦音), f ([f]), g (放出音のk), gc (歯吸着音), gq (歯硬口蓋吸着音), gx (側面吸着音), h ([h]), hl (無声のl), j (無声歯基摩擦音), k (有気軟口蓋摩擦音), k' (放出音のk), kh (有気音のk), kl (無声側面摩擦音), l ([l]), m ([m]), n ([n]), nc (鼻音化歯吸着音), ng (軟口蓋鼻音), ngc (鼻音化歯吸着音), ngq (鼻音化歯硬口蓋吸着音), ngx (鼻音化側面吸着音), nq (鼻音化歯硬口蓋吸着音), nx (鼻音化側面吸着音), ny (硬口蓋鼻音), p (放出音のp), ph (有気音のp), q (歯硬口蓋吸着音), qh (有気歯硬口蓋吸着音), s ([s]), sh (無声歯基硬口蓋摩擦音), t (放出音のt), th (有気音のt), tsh (無声歯基硬口蓋摩擦音), v ([v]), w ([w]), x (側面吸着音), xh (有気側面吸着音), y ([j]), z ([z]), m/n (子音前鼻音)。

bh/d/g/gc/gq/gx/j/ngc/ngq/ngx は、有声音だとされることがあるが、有声音というよりも、これらおよび dl/ng/v/z を含む音節のはじめが一般に他の場合より低く発音されるという点で、p/t/k/c/q/x/tsh/nc/nq/nx から容易に識別できるようである。この言語には、mu に由来する音節主音的 m もある。

このように、この言語の子音には、ズルー語やコサ語と同様、吸着音が含まれているが、吸着音は、先住民族の言語であるコイサン諸語からの借用によって、これらの言語に含まれるようになったものである。ただし、ズルー語やンデベレ語においては、吸着音の出現比率はコサ語に比して低い。

1-2. 文法

この言語の語順は、

inja enkulu yaluma abantu 「大きい犬が人々に噛みついた」

犬 大きい 噛んだ 人々

に見る如く、主語・述語・目的語といった順であり、このうち、述語のみが文中に必須である。名詞を修飾する形容詞等は、原則として名詞の後ろに立つ。

名詞は、他のバントゥ語と同じく、接頭辞によって容易に識別しうるいくつかのクラスに分類し、そのクラスに対応して名詞を修飾する形容詞等が主として語頭において音形交替を示し、また、述語動詞なども対応した音形交替を示す。これを「文法的呼応」と呼ぶことにする。

まず、名詞のクラスを名詞例によって示し、形容詞の語頭の形（接頭辞）をあげる。I～VIIIは単数名詞のクラス、IX以降は複数名詞のクラスである。ハイフンは（冒頭母音⁴つきの）接頭辞と語幹の境界を示す。実際の表記では、ハイフンはあらわれない。

I.	um-ntwana 「子供」, u-mama 「母」	omu-
II.	umu-thi 「薬」, um-yane 「蚊」	omu-
III.	i-lembe 「鋏」, ili-tshe 「石」	eli-
IV.	isi-sesetho 「篩い」, isi-lwane 「ライオン」	esi-
V.	im-fe 「さとうきび」, i-nyoni 「鳥」	en-
VI.	ulu-thi 「棒」, u-khozi 「鷹」	olu-
VII.	ubu-so 「顔」	obu-
VIII.	uku-dla 「食べ物」	oku-
IX.	aba-ntwana 「子供」, o-mama 「母」	aba-
X.	imi-thi 「薬」, imi-yane 「蚊」	emi-
XI.	ama-lembe 「鋏」, ama-tshe 「石」	ama-
XII.	izi-sesetho 「篩い」, izi-lwane 「ライオン」	ezin-
XIII.	izim-fe 「さとうきび」, izi-nyoni 「鳥」, in-luthi 「棒」, in-kozi 「鷹」	ezin-

XII と XIII は、接頭辞の上では区別があるが、文法的には一つのクラスとよい状態である。

umntwana omuhle 「いい子供」, ilembe elihle 「いい鋏」, (-hle 「いい」)

動詞の不定形（「～する（こと）」の意）は、uku + 動詞語幹 + a という形である。u- は冒頭母音である。

ukubona 「見る」.

動詞直説法形の主なものには、次のようなものがある。実例では、形態素の境界にハイフンを置くが、やはり実際の表記ではあらわれない。

- 1) 遠過去形 主格接辞 + a + 語幹 + a
s-a-bon-a 「私たちは見た」.
- 2) 過去形 (1) 主格接辞 + 語幹 + ile
si-bon-ile 「私たちは見た」.
- 3) 過去形 (2) 主格接辞 + 語幹 + e (あとに目的語等が続く)
si-bon-e ～ 「私たちは～を見た」.
- 4) 現在形 (1) 主格接辞 + ya + 語幹 + a
si-ya-bon-a 「私たちは見(てい)る」.
- 5) 現在形 (2) 主格接辞 + 語幹 + a (あとに目的語等が続く)
si-bon-a ～ 「私たちは～を見(てい)る」.
- 6) 未来形 主格接辞 + za + 語幹 + a
si-za-bon-a 「私たちは見る」.

- 7) 遠過去否定形 a + 主格接辞 + zange + 主格接辞 + 語幹 + e
a-si-zange si-bon-e 「私たちは見なかった」。
- 8) 過去否定形 a + 主格接辞 + 語幹 + anga
a-si-bon-anga 「私たちは見なかった」。
- 9) 現在否定形 a + 主格接辞 + 語幹 + i
a-si-bon-i 「私たちは見(てい)ない」。
- 10) 未来否定形 a + 主格接辞 + soze/soke + 主格接辞 + 語幹 + e
a-si-soze/soke si-bon-e 「私たちは見ない」。

主格接辞⁵⁾の形は、

単数1人称 ngi, 2人称 u, 3人称 (=クラスI) u (語幹 + eの前では a),
複数1人称 si, 2人称 li, 3人称 (=クラスIX) ba,
クラスII u, III li, IV si, V i, VI lu, VII bu, VIII ku, X i,
XI a, XII zi, XIII zi

であるが、主格接辞 + aの形は、nga, wa, wa, sa, la, ba, etc. となる。

なお、どの活用形においても動詞語幹直前に対格接辞⁶⁾がはいることがあり、その形は

単数1人称 ngi, 2人称 ku, 3人称 (=クラスI) mu/m,
複数1人称 si, 2人称 li, 3人称 (=クラスIX) ba,
クラスII wu, III li, IV si, V yi, VI lu, VII bu, VIII ku,
X yi, XI wa, XII zi, XIII zi

であり、また、対格接辞の一種として、再帰接辞⁷⁾ziがある。

s-a-li-bon-a 「私たちはあなたがたを見た」。

動詞には、直説法形の他にいくつかの種類の活用形があるが、次に、連体修飾形(関係節形)を見しておく。連体修飾形は、冒頭に、次に続く主格接辞の母音に対応する母音であらわれる。これを関係接辞と呼ぶことにする。関係接辞の形は主格接辞の母音がaならa、iならe、uならoである。その母音が、あとにaが続くことによって消失しても、あるいはy/wになっても変わらない。

- 1) 遠過去形 関係接辞 + 主格接辞 + a + 語幹 + a
omuntu o-w-a-bon-a 「見た人」。
- 2) 過去形(1) 関係接辞 + 主格接辞 + 語幹 + ile + yo
omuntu o-bon-ile-yo 「見た人」(o+u>o, 以下同様)。
- 3) 過去形(2) 関係接辞 + 主格接辞 + 語幹 + e
omuntu o-bon-e 「見た人」。
- 4) 現在形 関係接辞 + 主格接辞 + 語幹 + a + yo
omuntu o-bon-a-yo 「見(てい)る人」。
- 5) 未来形 関係接辞 + 主格接辞 + za + 語幹 + a
omuntu o-za-bon-a 「見る人」。
- 6) 過去否定形 関係接辞 + 主格接辞 + nga + 語幹 + anga
omuntu o-nga-bon-anga 「見なかった人」。
- 7) 現在否定形 関係接辞 + 主格接辞 + nga + 語幹 + i + yo

omuntu o-nga-bon-i-yo 「見(てい)ない人」.

- 8) 未来否定形 関係接辞 + 主格接辞 + nga + soze/soke +
主格接辞 + 語幹 + e

omuntu o-nga-soze/soke a-bon-e 「見ない人」.

被修飾名詞が、動詞のあらわす動作の主体をあらわさない場合も同様である。当然ながら、その場合、主格接辞は被修飾名詞に呼応しない。

omuntu e-s-a-bon-a 「わたしたちが見た人」.

2. 南ンデベレ語と北ンデベレ語

次に、音韻面と文法面での南ンデベレ語と北ンデベレ語の違いを概観する。

2-1. 音韻

音韻面では、両者に次のような違いが生じている。

- (1) 南ンデベレ語では、元来の nt (時に nd も) が nr に変化し、その結果、元来なかった舌尖ふるえ音 r が生じている。r は、母音間にもあらわれる。

南 umunru 北 umuntu 「人」.

舌尖ふるえ音を持つ言語は多いが、持たない言語の話し手がこれを発音するのは少し難しい。実際、日本人の少なくとも3分の1は、練習しなければ舌尖をふるわすことはできないであろう。しかし、1世紀半の間に(実際は、そのうちのかなり短い期間で)南ンデベレ語の話し手たちはこの音を有するにいたったのである。

- (2) 南ンデベレ語には、元来はなかった無声軟口蓋摩擦音(ここでは、gh であらわすこととする)が生じている。

南 amaragho 「尻」.

これは、おそらく、隣接言語(ツワナ語かペディ語)の影響によるものであろう。

- (3) 北ンデベレ語では、軟口蓋鼻音プラス軟口蓋破裂音 ng (北ンデベレ語でこの音がそのままあらわれる場合、n'g であらわすことにする)の大半が軟口蓋鼻音になっている。

北 ucabango 「心臓」.

なお、ng が軟口蓋鼻音になっている方言がズルー語にもあるらしく、南ンデベレ語と北ンデベレ語のどちらが古い形(つまり、分裂当時の形)を保存しているのか、現段階では結論できない。

2-2. 文法

文法面では、両者に次のような違いが生じている。

- (1) 南ンデベレ語では、u(lu) を接頭辞とする名詞クラス(クラス VI)が廃れる傾向を見せ、i(li) を接頭辞とするクラス(クラス III)に合流しつつある。

南 uphondo → iphondo 北 uphondo 「笛」.

- (2) 南ンデベレ語で、未来の行為をあらわす形は、

主格接辞 + zo + 語幹 + a および

主格接辞 + yo + 語幹 + a

という構造であるが、北ンデベレ語では、上述の如く、

主格接辞 + za + 語幹 + a

である。

元来、ukuza「来る」、ukuya「行く」（ともに不定形であげた）という動詞があって、それが未来形の構成に用いられるようになっていたのだが、南ンデベレ語の形は、za/ya + ku ~に由来し、(冒頭母音のつかない)不定形を用いたものと考えられる。

因みに、コサ語は、

主格接辞 + za + ku + 語幹 + a および

主格接辞 + ya + ku + 語幹 + a

であり、スワティ語は、

主格接辞 + to + 語幹 + a

であり(スワティ語のtの一部はその他の言語のzに対応する)、ズルー語は、

主格接辞 + zo + 語幹 + a および

主格接辞 + yo + 語幹 + a

という構造である。従って、北ンデベレ語のほうが新しい形と考えられる。

- (3) 複数2人称主格・対格接辞は、北ンデベレ語が、上述の如く、liであるが、南ンデベレ語ではniである。

コサ語、スワティ語、ズルー語は、すべてniであり、北ンデベレ語のほうが新しい形と考えられるが、隣接言語(ツワナ語やベディ語)がle(このeは狭いeで、ズルー語などの5母音言語のi(の一部)に対応する)であることを考えると、それらの影響と考えられる。というよりも、南アフリカにいた時に吸収した人々の中にツワナ語やベディ語の話し手がかなりいて、その人々の言語的特徴が北ンデベレ語に採用されたのであろう。

因みに、現在の北ンデベレに東部・北部から接するショナ語では、niでもliでもなくて、主にmuである。

- (4) 被修飾名詞が連体形動詞のあらゆる動詞の主体をあらゆるのでない場合に顕在化することであるが、北ンデベレ語では、上述の如く、連体形動詞の冒頭の関係接辞が主格接辞の母音に対応して音形交替するのに対し、南ンデベレ語では、被修飾名詞のクラスに呼応して音形交替する。名詞がuを含む接頭辞を有するクラスの場合がoで、それ以外の場合がeである。

南 omuntu o-ngi-bon-ile 北 omuntu e-ngi-bon-ile 「私が見た人」。

コサ語、ズルー語は、北ンデベレ語と同様であるので、南ンデベレ語の状態は新しいものだと考えられる。なお、南ンデベレ語においても、北ンデベレ語と同じ規則に従って関係接辞があらわれることも可能のようである。

3. 語彙の比較

最後に、言語間の差異が比較的定量的に計測できる語彙の比較を行う。対象としたのはバントゥ系の言語にとって重要と考えられる200項目である。これは、湯川(1979)で太字で示した項目を若干入れ換えたものである。⁹⁾ こうした比較は、さほど正確に差異の程度を示すものではないが、ある程度は示すものと考えられる。名詞は単数形で示し、()内に複数形の語頭もしくは全体を示した。

動詞は、不定形をあげた。同根と考えられる項目には、異同欄に○をつけ、そうでないものは×をつけた。一方の言語に2つ以上の単語があがっている場合、一つでも一致すれば○とした。△は、語彙群の一部のみが一致することを示し、0.5の一致と考えた。備考欄は、湯川（1979）における番号である。

	北ンデベレ語	南ンデベレ語	異同	備考
1. 頭	ikhanda (ama-)	ihloko (izi-)	X	1 - 01
2. 髪	unwele (izi-)	inhluthu (izin-)	X	1 - 04
3. 顔	ubuso	ubuso (amabuso)	O	1 - 07
4. 目	ilihlo (amehlo)	ilihlo (amehlo)	O	1 - 10
5. 鼻	ikhala (ama-)	impumulo (izim-)	X	1 - 15
6. 口	umlomo (imi-)	umlomo (imi-)	O	1 - 17
7. 舌	ulimu (inlimi)	ilimu (amalimu)	O	1 - 19
8. 歯	izinyo (ama-)	izinyo (ama-)	O	1 - 20
9. 耳	indlebe (izin-)	indlebe (izin-)	O	1 - 25
10. 首	intamo (izin-)	inramo (izin-)	O	1 - 30
11. 体	umzimba (imi-)	umzimba (imi-)	O	2 - 01
12. 肩	ihlombe (ama-)	ihlombe (ama-)	O	2 - 05
13. 乳房	ibele (ama-)	ibele (ama-)	O	2 - 07
14. 背中	umgogoda (imi-) umuhlane (imi-)	umgogoda (imi-)	O	2 - 18
15. 尻	isibunu (izi-) isithebe (izi-)	iragho (ama-)	X	2 - 19
16. 腕	ingalo (izin-)	isandla (izandla)	X	3 - 01
17. 指	umunwe (imi-)	umunwe (imi-)	O	3 - 06
18. 爪	uzipho (in-)	izipho (ama-)	O	3 - 12
19. 脚	umlenze (imi-)	inyao (izi-)	X	4 - 01
20. 骨	ithambo (ama-)	ithambo (ama-)	O	5 - 01
21. 血	igazi	igazi (izi-)	O	5 - 10
22. 心臓	inhliziyo (izin-) ucabango (in-)	inhliziyo (izin-)	O	5 - 13
23. 肝臓	isibindi (izi-)	isibindi (izi-) ubende (ama-)	O	5 - 16
24. 涙	unyembezi (i-)	inyembezi (izi-)	O	6 - 02
25. 唾	amathe	amathe	O	6 - 17
26. 見る	ukubona	ukubona	O	7 - 01
27. 探す	ukudinga	ukufuna	X	7 - 07
28. 聞く	ukuzwa	ukuzwa	O	7 - 15

29. 傷	isilonda (izi-) inxeba (amanxeba)	isilonda (izi-)	O	10-04
30. 吐く	ukuhlanza	ukuhlanza	O	12-09
31. 疲れる	ukukhathala			12-10
	ukudinwa	ukudinwa	O	
32. 治る	ukwelatshwa			14-12
	ukuphola	ukuphola	O	
33. まじない師	umthakati (ama-)			14-17
	inyanga (izi-) (医者)	inyanga (izi-)	O	
34. 着物	impahla (izim-)	impahla (izim-)	O	15-01
	izambatho			
35. 着る	ukugqoka			15-04
	ukwembatha	ukumbatha	O	
36. 洗う	ukugeza	ukuhlamba	X	15-15
37. 干す	ukuchaya	ukweneka	X	15-18
38. 縫う	ukuthunga	ukuthunga	O	16-09
39. 塩	itshwayi	itswai (ama-)	O	19-14
40. 油脂	amafutha	amafutha	O	19-16
41. 料理する	ukupheka	ukuphega	O	20-01
42. 焼く	ukosa	ukosa	O	20-09
43. 食べる	ukudla	ukudla	O	22-01
44. 飲む	ukunatha			22-10
	ukuphuza	ukuphuza	O	
45. 腹がへる	ukulamba	ukulamba	O	22-15
46. 腐る	ukubola	ukubola	O	23-16
47. 家	indlu (izindlu)	indlu (izindlu)	O	24-01
48. 建てる	ukwakha	ukwakha	O	24-02
49. 閉める	ukuvala	ukuvala	O	24-06
50. 掃く	ukuthanyela	ukutshanela	O	26-02
51. 父	ubaba (o-) (私の父) uyihlo (o-) (君の父) uyise (o-) (彼の父)	ubaba (abobaba)	△	27-01
52. 母	umama (o-) (私の母) unyoko (o-) (君の母) unina (o-) (彼の母)	umama (abomama)	△	27-08
53. 子	umnswana (aban-) in'gane (izin'gane)	umnswana (aban-)	O	27-30
54. 夫	indoda (amadoda)	inroda (amanroda)	O	28-10

55. 妻	unkosikazi (an-)	umfazi (aba-)	X	28-12
56. 生む	ukuzala ukukhululeka ukubeletha	ukuzala	O	29-04
57. 名前	igama (ama-) ibizo (ama-)	igama (ama-)	O	29-10
58. 育つ	ukukhula	ukukhula	O	29-14
59. 人	umunthu (aba-)	umnru (abanru)	O	30-01
60. 死ぬ	ukufa	ukufa	O	31-01
61. 犬	inja (izinja)	inja (izinja)	O	32-04
62. 噛みつく	ukuluma	ukuluma	O	32-08
63. 牛	inkomo (izin-)	inkomo (izin-)	O	32-10
64. 豚	in'gulube	ingulube (izin-)	O	32-25
65. 山羊	imbuzi (izim-)	imbuzi (izim-)	O	32-27
66. 動物	inyamazana (izi-)	isilwane (izi-)	X	33-01
67. ライオン	isilwane (izi-)	ibhubezi (ama-)	X	33-07
68. 象	indlovu	indlovu (izin-)	O	33-21
69. カバ	imvubu	imvubu (izim-)	O	33-27
70. 尻尾	umsila (imi-)	umsila (imi-)	O	33-55
71. 槍	umkhonto (imi-)	umkhonto (imi-)	O	34-20
72. 毘	umthambo (imi-)	umthambo (imi-)	O	34-24
73. 肉	inyama	inyama (izi-)	O	34-39
74. 蛇	inyoka	inyoka (izi-)	O	35-01
75. 鱉	in'gwenya	ingwenyana (izin-)	O	35-15
76. 蛙	ixoxo (ama-)	isicoco (izi-)	O	36-07
77. 魚	inhlanzi (izin-)	inhlanzi (izin-)	O	37-01
78. 鳥	inyoni (izi-)	inyoni (izi-)	O	38-01
79. 鶏	inkukhu	inkukhu (izin-)	O	38-19
80. 卵	iqanda (ama-)	iqanda (ama-)	O	38-25
81. 飛ぶ	ukuphapha	ukuphapha	O	38-35
82. 蜂	inyosi	inyosi (izi-)	O	39-02
83. 蚊	umyane (imi-)	unompopoloji (abo-)	X	39-18
84. 蠅	impukane	impugane (izim-)	O	39-26
85. 木	isihlahla (izi-)	isihlahla (izi-)	O	40-01
86. 枝	ugatsha (in'gatsha)	ikala (ama-)	X	41-12
87. 葉	ihlambu (ama-)	icolo (ama-)	X	41-14
88. 種	intanga	imbewu (izim-)	X	41-19
89. 根	impande (izim-)	impande (izim-)	O	41-26

90. 耕す	ukuhlakula ukulima (農耕する)	ukuhlagula ukulima (農耕する)	O	42-09
91. 鍬	ikhuba (ama-) ilembe (ama-)	ilemba (ama-)	O	42-10
92. 眠る	ukulala	ukulala	O	44-03
93. 夢	iphupho (ama-)	iphupho (ama-)	O	44-06
94. 目覚める	ukuphaphama ukuvuka	ukuvuga	O	44-11
95. 立つ	ukusukuma ukusimuka ukuma	ukujama	X	45-01
96. 坐る	ukuhlala	ukuhlala	O	45-04
97. 行く	ukuhamba ukusuka ukuya	ukukhamba	O	46-01
98. 来る	ukuza ukubuya	ukuza	O	46-06
99. 入る	ukun'gena	ukungena	O	46-08
100. 出る	ukuphuma	ukuphuma	O	46-09
101. 着く	ukufika	ukufiga	O	46-21
102. 通る	ukwedlula	ukudlula	O	46-42
103. 道	indlela (izin-) indledlana (izin-)	indlela (izin-) indledlana (izin-)	O	46-66
104. 斧	ihloka (ama-)	imbazo (izim-)	X	47-21
105. 火	umlilo (imi-)	umlilo (imi-)	O	48-01
106. 灰	umlotha (imi-)	umlotha	O	48-03
107. 煙	intuthu	inruthu (izin-)	O	48-04
108. 燃える	ukutsha	ukutsha	O	48-10
109. 消す	ukucitsha	ukucima	X	48-14
110. 薪	inkuni	ukhuni (ama-)	O	48-17
111. 水	amanzi	amanzi	O	49-01
112. 乾く	ukoma	ukuoma	O	49-12
113. 言う	ukutsho	ukutsho	O	50-05
114. 呼ぶ	ukubiza	ukubiza	O	50-22
115. 尋ねる	ukubuza	ukubuza	O	50-36
116. 教える	ukufundisa ukulayeza	ukufundisa	O	50-70
117. 遊ぶ	ukudlala	ukudlala	O	51-01

118. 歌う	ukuhlabela	ukucula	X	51-08
119. 太鼓	inIgungu	isigubhu (izi-)	X	51-10
120. 投げる	ukujika			51-28
	ukuphosa	ukuphosa	O	
121. 罵る	ukuthuka	ukuthuka	O	52-01
	ukuthethisa			
122. 殴る	ukutshaya			52-12
	ukubetha	ukubetha	O	
123. 与える	ukupha	ukupha	O	53-01
	ukunika			
124. 盗む	ukuntshontsha	ukutshontsa	O	53-37
	ukweba			
125. 客	isathekele (iza-)	isivagashi (izi-)	X	54-30
	isimenywa (izi-)			
126. 待つ	ukumelela	ukujama	X	54-39
	ukulinda			
127. 殺す	ukubulala	ukubulala	O	56-12
128. 笑う	ukuhleka	ukuhleka	O	57-04
129. 泣く	ukukhala			57-09
	ukulila	ukulila	O	
130. 好む	ukuthanda	ukuthanda	O	57-12
131. 恐れる	ukwesaba	ukusaba	O	57-22
132. 忘れる	ukukhohlwa	ukukhohlwa	O	58-03
	ukulibala			
133. 一	kunye	gunye	O	59-01
134. 二	kubili	gubili	O	59-02
135. 三	kuthatha	gunrathu	O	59-03
136. 四	kune	gune	O	59-04
137. 五	kuhlanu	gunhlanu	O	59-05
138. 十	kulitshumi	ishumi	O	59-10
139. 多くの	-nengi	-ningi	O	59-31
140. 全ての	-nke	-khe	O	59-35
141. 神	unkulunkulu	umkulunkulu	O	60-01
	umdali			
142. 落ちる	ukuwa	ukuwa	O	61-12
143. 拾う	ukudobha	ukudopha	O	61-13
144. 持ってくる	ukuletha	ukuletha	O	61-14
145. 置く	ukubeka	ukubega	O	61-29

146. 隠す	ukufihla	ukufihla	O	61-39
147. 引っ張る	ukusondeza	ukudosa	X	61-60
148. 押す	ukusunduza	ukutshova	X	61-62
149. 結ぶ	ukubopha	ukubopha	O	62-01
150. ほどく	ukukhulula			62-02
	ukubophulula	ukubophulula	O	
151. 曲げる	ukugobisa	ukugoba	O	63-01
152. 切る	ukuquma			64-01
	ukusika	ukusiga	O	
153. 折る	ukuqamula			64-06
	ukwephula	ukuhlephula	O	
154. 破る	ukudabula	ukudabula	O	64-14
155. 上	phezulu	phezulu	O	67-05
156. 下	phansi	phasi	O	67-06
157. 中	phakathi	phagathi	O	67-07
158. 外	phandle	phandle	O	67-08
159. 赤い	-bomvu	-bovu	O	68-03
160. 白い	-mhlophe	-mhlophe	O	68-06
161. 黒い	-mnyema	-mnyama	O	68-09
162. 太陽	ilanga	ilanga	O	69-02
163. 月	inyanga	inyanga	O	69-03
164. 星	inkanyezi (izin-)	inkanyezi (ama-)	O	69-08
165. 雲	iyazi (ama-)	ilifu (amafu)	X	69-11
166. 雨	izulu	imvula	X	69-14
167. 風	umoya	umoya (imimoya)	O	69-28
168. 山	intaba (izin-)	inraba (izin-)	O	71-01
169. 森	igusu (ama-)			71-08
	ihlathi (ama-) (林)	ihlathi (ama-)	O	
170. 川	umfula (imi-)	umfula (imi-)	O	72-01
171. 沈む	ukucwila	ukucwila	O	72-29
	ukugalula			
172. 渡る	ukuchapha	ukweqa	X	72-33
173. 泳ぐ	ukubhukutsha	ukubhuguta	O	72-45
174. 地面	umhlaba	umhlabathi (imi-)	O	73-01
175. 石	ilitshe (amatshe)	ilitshe (amatshe)	O	73-02
176. 土	umhlabathi (imi-)	umhlabathi	O	73-07
177. 穴	umgodhi (imi-)	umgodhi (imi-)	O	73-19
	umlindi (imi-)			

178. 埋める	ukugqibela	ukuncwaba	X	73-24
179. 日	ilanga usuku (in-)	ilanga (ama-)	O	74-03
180. 夜	ubusuku	ebusuku	O	74-08
181. 昨日	izolo	izolo	O	74-12
182. 今日	namuhla lamuhla	namhlanje	O	74-13
183. 明日	kusasa	kusasa	O	74-14
184. 年	umnyaka (imi-)	umnyaga (imi-)	O	74-19
185. 良い	-hle	-hle	O	75-01
186. 悪い	-bi	-mbi	O	75-02
187. 大きい	-khulu	-khulu	O	75-05
188. 小さい	-ncane	-ncane	O	75-08
189. 長い	-de	-de	O	75-11
190. 短い	-fitshana	-fitshane	O	75-14
191. 重い	-nzima	ukusinda	X	75-17
192. 寒い	kuqanda kugodola	kumakhaza	X	75-28
193. 新しい	-tsha	-tsha	O	75-38
194. 物	into (izinto)	inro (izinro)	O	79-01
195. 私	mina	mina	O	80-01
196. あなた	wena	wena	O	80-02
197. 私たち	thina	thina	O	80-04
198. あなたがた	nina	nina	O	80-05
199. 誰	ubani	ubani	O	81-01
200. 何	ini	ini	O	81-02

O 168 X 32

一致率は84%である。この結果をどう見るかであるが、南アフリカやボツワナに話されるツワナ語諸方言について筆者が別に行った計算の結果に比べると、1世紀半という比較的短い時間を考えるならば差異が大きいような感じがする。これは、おそらく、両ンデベレ語の接触が絶たれてきたという事情によるのであろう。ただし、分裂直前のンデベレ語がどの程度に等質的であったか分からないこともあって、この結果の評価としては「少し差異が大きいような感じがする」という以上のことはいえないようである。いずれにしても、1世紀半の間にどれだけの差異が生じるかという問題に関する、一つのデータであるといえよう。

参考文献

湯川恭敏：「バントゥ諸語語彙調査票試案」

- 【アジア・アフリカ言語文化研究】17, pp. 139-212. 1979. 2.
 ————:「南ンデベレ語動詞アクセント試論」
 【アジア・アフリカ文法研究】25, pp. 51-81. 1997. 3.
 ————:「北ンデベレ語動詞アクセント試論」
 【アジア・アフリカ文法研究】26, pp. 75-121. 1998. 3.

注

- 1) 北ンデベレ語の調査は、1994～1996年度文部省科学研究費補助金による調査の一環として、1996年にジンバブエで行った。この言語のインフォーマントは、1972年にブラワヨ北方のNkayに生まれたLiberty Moyo氏である。両親ともンデベレ族である。
 一方、南ンデベレ語の調査は、やはり1994～1996年度文部省科学研究費補助金による調査の一環として、1995・96年に南アフリカで行った。インフォーマントは、1970年にKwandebeleのSiyabuswaに生まれたJacobeth Lekolwaneさんである。両親ともンデベレ族である。
- 2) 声帯を閉じて上にあげ、その上方の気圧を高めて発する破裂音。ただし、この言語のそれは、さほどはっきりした放出音ではない。
- 3) 吸着音とは、舌の後部を軟口蓋付近に密着させ、かつ、その前方のどこかで閉鎖を形成し、その間の空間の容積を大きくして気圧を低め、前の閉鎖を開いて空気を急激に内向きに動かして発する音のこと。舌打ちの音もこれである。出すのは容易であるが、言語音として発するには訓練を要する。
- 4) 通常の接頭辞の前にある母音があらわれる言語がかなりあり、消滅していてもその痕跡を残している言語もかなりある。
- 5) 動詞のあらわす行為の主体たる人称もしくは主体をあらわす名詞のクラスに呼応して音形交替する部分。
- 6) 動詞のあらわす行為の対象たる人称もしくは対象をあらわす名詞のクラスに呼応して音形交替する部分。
- 7) 行為の主体が何であっても、形は不変である。
- 8) 200語というと、M. Swadeshのそれが有名で、かつては、2つの同系統言語の語彙をSwadeshの200語について比較すれば別れた年代が分かると主張されたが、そんなことはちょっといえないことが間もなく明らかになった。(実は当初の段階でそのことに気づくべきであったが、数学的常識の欠如がそれを妨げたようである。)なお、Swadeshの200語には、一般言語学的に見て適当とはいえないものも含まれている。
 筆者の採用した200語は、バントゥ諸語についてのみ通用するもので、かつ、便宜的なものであり、決して過大評価すべきものではない。

Two Ndebele Languages

YUKAWA Yasutoshi

In Southern Africa we find two languages called Ndebele (isindebele) akin to Zulu, one of which is spoken around Bulawayo, Zimbabwe, and the other in Kwandebele, to the north of Pretoria, South Africa. Their speakers parted from each other in 1838. Now these two languages show some phonological and grammatical differences.

The main part of this paper is devoted to the comparison of their vocabularies, which shows that, of 200 selected pairs of semantically corresponding basic words, 168 can be taken to be cognate. This figure might be a bit smaller than that in the case of other genealogically related languages.